

大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査Ⅱ 市原 誠 (戦時中の大磯に関する調査市民協力者)

1. はじめに

第2次世界大戦末期の1945年(昭和20年)春以降、神奈川県中郡大磯町西小磯地区に米軍の本土上陸に備えた坑道が多数掘削された。本稿では、調査が終了した西小磯1号壕～4号壕の4ヶ所を掲載するが、いずれも総延長が長くなく比較的短期間で掘削作業を放棄したように感じられる。これらの壕が、いつどのような目的で誰が坑道(遺構)に向き合っていたのかを検証していくこととしたい。

坑道の名称であるが、大磯町郷土資料館学芸員の富田三紗子氏と協議した上で、便宜的に地名と単に実測した順に番号を付けて記録していくこととした。調査期間については、2019年(令和元年)11月13日、12月20日、2020年1月16日、3月19日の計4日間となっている。その後も調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて終了が早まってしまった。

2. 構築部隊と時代的背景

第2次世界大戦末期、相模湾正面における対上陸防御は第53軍⁽¹⁾の管轄であり、その隷下師団である第84師団、第140師団⁽²⁾、第316師団の3個師団などが防禦陣地を構築中であった。当初、大磯地区は第140師団歩兵第402連隊⁽³⁾が主として布陣していたが、第3次兵備で第316師団が編成され追加配備されることとなる。そのため、本来であれば歩兵第402連隊は配置転換すべきなのだろうが、連隊長であった故鈴木薫二氏⁽⁴⁾の強い意向で上級司令部のみ変更という異例の処置となった。このような経過で、今日、巷で垣間見ることが出来る部隊配置図などでは、大磯地区は第316師団の布陣地域となっている。

しかし緊迫、混乱した時代背景の中で、上級司令部変更処置が各兵士に伝わっていたのかは未知数だ。実際に、この異例処置を語る証言者は僅かであった。

西小磯1～4号壕の掘削作業にあたった部隊であるが、歩兵第402連隊第4大隊第4、5、6挺進中隊と推測する。その根拠だが、同部隊は、当初、鷹取山拠点で陣地構築を鋭意行なっていたが、1945年(昭和20年)7月17日、縦深配備から水際配備へと作戦変更が発令された際に、新編の第316師団歩兵第351連隊が同拠点に進出することとなったため、配置転換を余儀なくされていた。故鈴木薫二氏も鷹取山拠点では自身の強い意向を通せず配置転換を受け入れざるを得なかったのか、師団司令部同士でどのようなやり取りがあったのか真相は不明のままである。

この作戦変更による周辺地域における同連隊の部隊配置を整理してみると、故清水孝氏⁽⁵⁾の証言を参考にして筆者が推測した域は出ないが、歩兵第402連隊の第1大隊は西小磯汀線、第2大隊は二宮から国府本郷汀線及び内陸部、第3大隊は千畳敷山周辺が布陣地であったと判断する。かつ生沢地区や西小磯地区の内陸部は、元々部隊空白地帯だったと思われるが、この地には第4大隊が進出したことと考えられる。歩兵第402連隊第4大隊所属の阿部義明氏⁽⁶⁾によれば、同隊は連隊内唯一の反撃大隊だったという。そのため、縦深配備から水際配備への作戦変更が行なわれても、汀から少し下がった丘陵地帯で陣地構築を始めたのだろう。ちなみに、阿部義明氏は、作戦変更後は鷹取山拠点から少し汀線に近付いた生沢地区で陣地構築の陣頭指揮を執ったと証言した。

本稿に収録した4ヶ所の坑道掘削部隊と掘削時期は、携わった当事者証言こそ得られなかった。しかし、阿部義明氏所属の歩兵第402連隊第4大隊が同連隊内唯一の反撃大隊だったため、1945年7月下旬以降に、汀線から一歩下がった反撃に適した場所で陣地構築を開始したと判断した次第である。しかし、終戦まで僅か2週間程度しかなかったため、いずれの遺構も小規模の半端な作りで放棄されていることと思われた。

その進出理由は、次章で述べることとしたい。

3. 西小磯1～4号壕の構築目的は？

いざ米軍が来寇した際に、大磯地区は本土防衛の最前線だったといっても決して過言ではない。大磯地区は歩兵第402連隊の本部もあり、付近の丘陵地帯には多数の重砲陣地も構築された。狭範囲の割に配備されている兵力が多いのが特徴である。有事の際は、大磯海岸からも米軍の上陸が高い確率であり得ると想定されたため、多数の本土決戦陣地が構築された。まず、米軍は西小磯海岸に殺到し、ここでは汀線陣地を敷いていた第1大隊が対応し、鷹取山拠点の24cm榴弾砲陣地や吾妻山の14cm加農砲陣地も盛んに火を噴いたことは容易に想像できる。それでも上陸し、内陸への侵攻を試みる米軍に対しては、生沢地区や西小磯地区内陸部(西小磯1～4号壕が該当)に構築された陣地で対応する戦術を想定していたのではなかろうか。

第4大隊の陣地構築は、終戦までにほとんど進捗していないため、全体像は掴み切れない。しかし、米軍来寇を迎えるころにはお互いの陣地の死角をカバーし合い効率的に反撃することが出来るまでに仕上がっただろう。その反撃は、米軍侵攻部隊に対して決して生還の望みがない斬り込みをかける以外の手法はなかったであろうし、その疑いの余地もない。

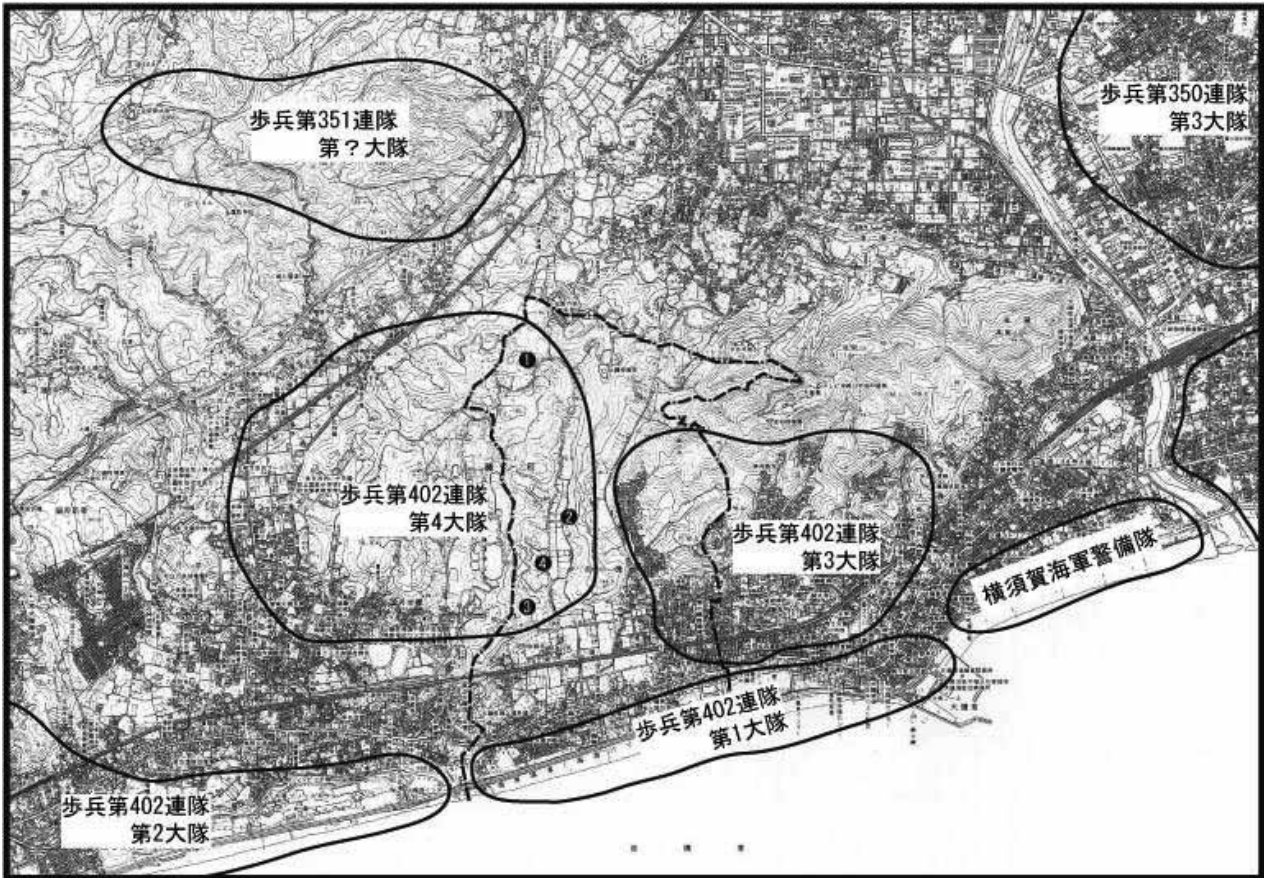


図1 1945年（昭和20年）8月ころにおける大磯地区の歩兵連隊布陣図（推定により作図）
西小磯地区の①～④は、西小磯1号壕～西小磯4号壕の場所を表す。

①西小磯1号壕

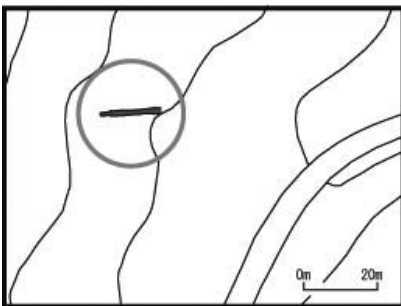


図2 西小磯1号壕位置

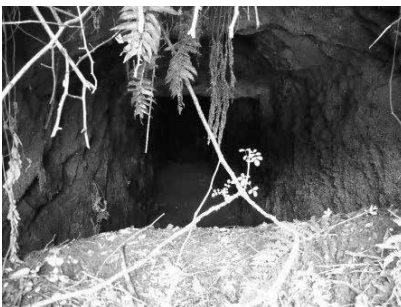


写真1 西小磯1号壕入口
2020年（令和2年）4月15日撮影

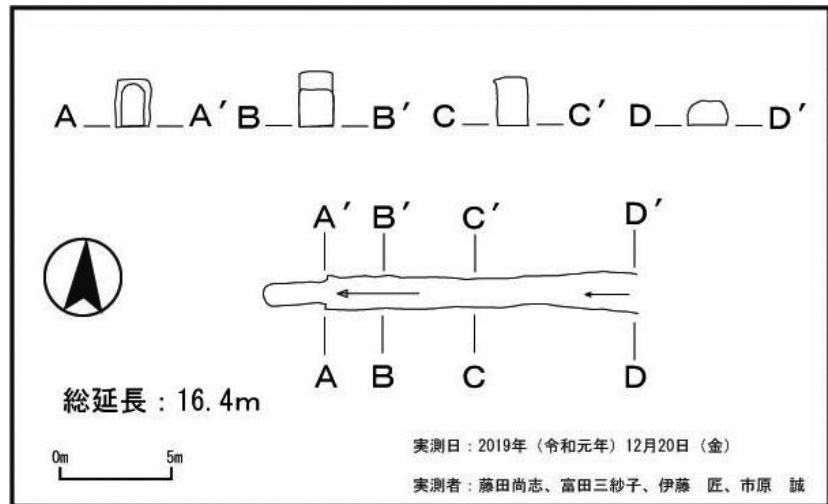


図3 西小磯1号壕実測図

1本坑道で、入口から奥に向かって緩やかな下り傾斜となっている。目立った崩落や湧水は、見受けられず内部は乾燥していた。綺麗に掘削されているため、一定以上の技術を持ち合わせた兵士が作業にあたったのだろう。

②西小磯 2 号壕

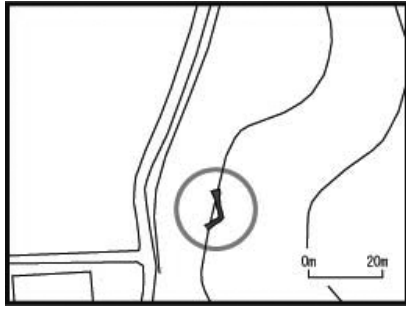


図 4 西小磯 2 号壕位置



写真 2 西小磯 2 号壕北側入口
2020 年（令和 2 年）4 月 15 日撮影

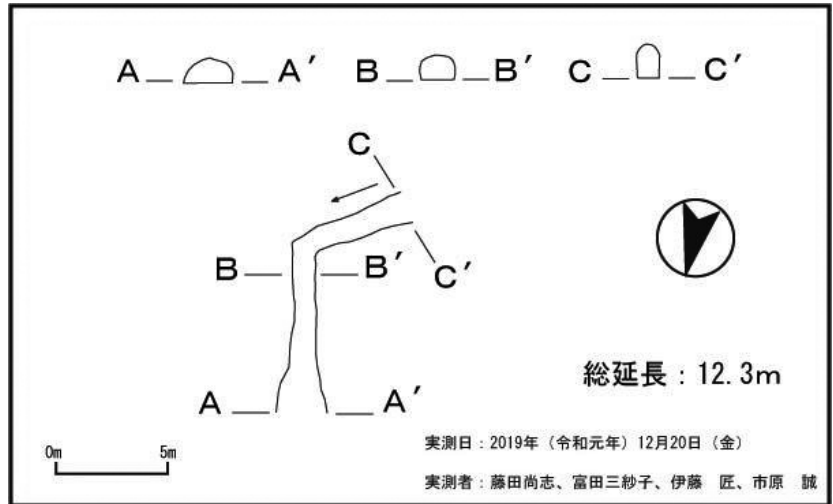


図 5 西小磯 2 号壕実測図

L字型を呈する。目立った崩落、湧水ともに見受けられず。西小磯 2 号壕の用途は、この状態で完成しているとはいえず半端な仕上がりのためはっきりしない。しかし、この壕が最大限活用される時はもはや尋常ではない絶望的な状況は明らかだ。

③西小磯 3 号壕

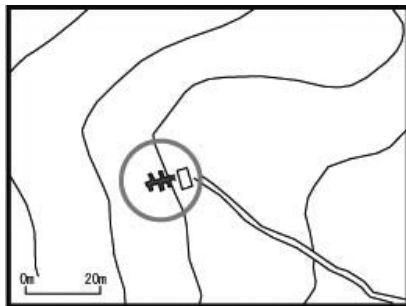


図 6 西小磯 3 号壕位置



写真 3 西小磯 3 号壕入口
2020 年（令和 2 年）4 月 15 日撮影

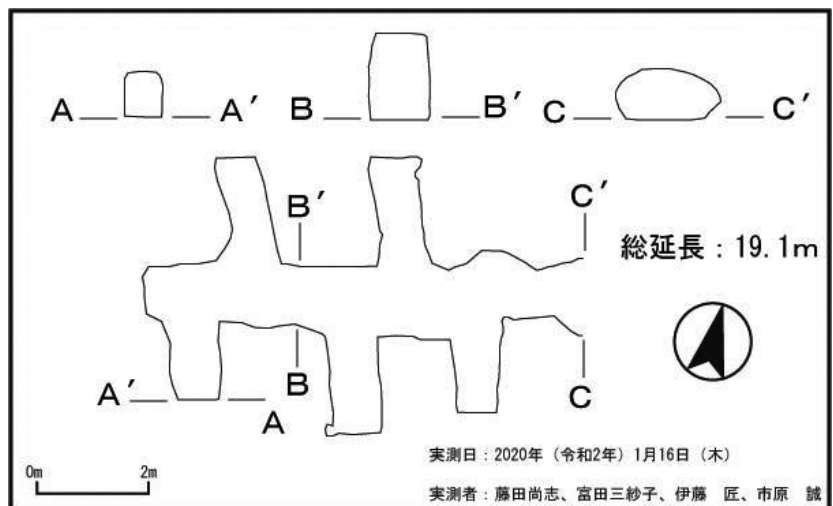


図 7 西小磯 3 号壕実測図

当地を所有する方の話によると、軍の兵士が掘削したのは直線坑道のみだという。5つの部屋については、戦後、作物を保管するために掘削したものだという。作物の保管に活用されたことは確実と思われるものの、5つの部屋の掘削については、終戦時に完了していた可能性もある。

西小磯 3 号壕は、来寇した米軍を観測するには十分な見晴らしで、最深部には通気孔が準備されている。諸条件を考慮すると、5つの部屋は弾薬庫、通気孔はガス抜き穴で火力を伴う陣地である理屈が通る。

④西小磯 4 号壕

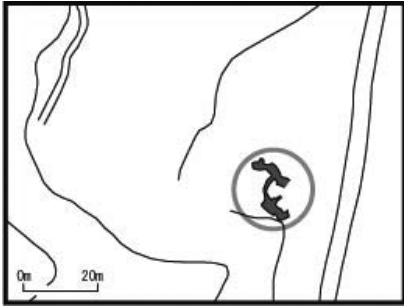


図 8 西小磯 4 号壕位置



写真 4 西小磯 4 号壕南側入口
2020 年（令和 2 年）4 月 15 日撮影

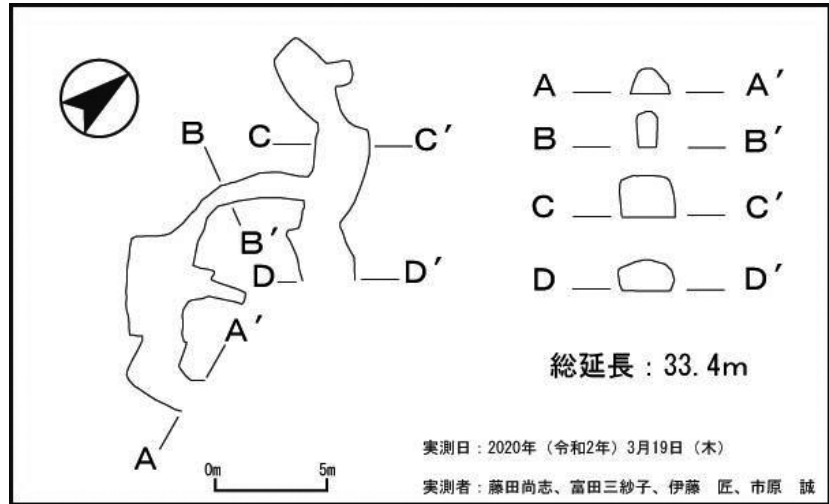


図 9 西小磯 4 号壕実測図

推測だが、MG（マシンガン）陣地と斬り込み隊待機壕として両方の機能を考慮していたのだろうか。
 実測図D付近は、ツルハシの掘削痕が見受けられず古墳を拡張した坑道であると思われた。しかし、大磯町郷土資料館が 1994 年（平成 6 年）に刊行した『大磯町の横穴墓群』には、西小磯 4 号壕が収録されておらず、戦時中の防空壕として処理された可能性がある。
 現状は、実測図C付近から奥はコンクリブロックや石切り場から切り出された石が、多数保管してある。目立った崩落は見受けられず、湧水もなかった。

謝辞

本稿の執筆にあたり、阿部義明氏（元歩兵第 402 連隊第 4 大隊第 6 挺進中隊第 3 小隊小隊長）に、ご教示を賜った。改めて、感謝申し上げたい。

主要参考文献

- ・清水孝（『第 100 師団（鉄兵団）士官候補生・第 140 師団（護東兵団）新品少尉相集い共に大いに語らん哉』2000 年）
- ・市原誠（『近代戦跡考古学 22（軍装操典 101 号）』2010 年）
- ・市原誠（『近代戦跡考古学 51（軍装操典 140 号）』2020 年）
- ・市原誠「大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査」（『年報—平成 29 年度—』大磯町郷土資料館、2019 年）
- ・市原誠（『平塚市博物館研究報告 自然と文化 34 号』2011 年）
- ・市原誠（『平塚市博物館研究報告 自然と文化 43 号』2020 年）

注

- (1) 1945 年（昭和 20 年）4 月 8 日に編成された軍のひとつ。司令部は現厚木市玉川小学校にあった。軍司令官は、赤柴八重蔵中将。
- (2) 陸軍師団のひとつ。1945 年（昭和 20 年）2 月 28 日に東京で編成。司令部は、片瀬にあった。
- (3) 1945 年（昭和 20 年）5 月 2 日に甲府で編成された。
- (4) 1893 年（明治 26 年）1 月 6 日、兵庫県にて出生。陸士 25 期。1945 年（昭和 20 年）4 月 2 日、第 140 師団歩兵第 402 連隊の連隊長に着任。最終階級は、陸軍大佐。戦後は、B 級戦犯となり重労働終身刑の判決を受ける。1952 年（昭和 27 年）6 月 17 日、東大病院にて胃癌にて逝去。享年 59 歳。
- (5) 1925 年（大正 14 年）7 月 4 日生。陸士 58 期。陸軍少尉。終戦時は、大磯海岸布陣。2012 年（平成 24 年）3 月 6 日逝去。享年 86 歳。筆者がもっとも、ご教示を頂いた方の 1 人である。生前の氏の強い意向で、筆者に散骨するようにいわれており、その遺言を受け入れた。遺言通りに某所に散骨を果たす。
- (6) 1924 年 11 月 16 日生。御年 95 歳。第 140 師団歩兵第 402 連隊小隊長。陸軍少尉。戦時中から教職に就く。最終は、公立小学校校長。筆者は、現在も非常に近しくご指導を頂いている。